

光源の始

論学人鮮朝日在

良治貝磯



著者略歴

磯貝 治良（いそがい じろう）

1937年、愛知県知多半島に生まれる。

新日本文学会会員

主な著書に、小説集「今日 零に向って起つ」（実存社）、ルポ「れん みんなの中国」（愛知新報社）。共同執筆に、「被差別部落Ⅱ都市」（三一書房）、「ふるさとの文学・愛知篇」（文京書房）などがある。

現住所

愛知県西春日井郡西枇杷島北大和町 151

光源の光——在日朝鮮人文学論

0095—0114—4249

1979年 9 月20日 初版第 1 刷発行

定価 1500円

著 者 磯貝 治良

発 行 所 株式会社 創樹社

電話 東京815・3331～2 振替 東京2・154580

東京都文京区湯島 2—2—1 〒 113

本文印刷 松沢印刷

装本印刷 広 陵

製 本 美行製本

1979© Ziro Isogai 乱丁・落丁本はお取り替えます。

光源の始

在日朝鮮人文学論

磯貝治良



創樹社



始源の光

——在日朝鮮人文学論

磯貝

治良

目次

始源の光

——金史良論 7

抵抗と背信と

——金達寿『玄海灘』覚書 55

金石範の〈原〉民衆像

——朴書房から万徳へ 83

剔抉と架橋と

——吳林俊の軌跡

127

復元と対峙と

——金時鐘ノート

151

明澄と凝視と

——金泰生論

165

「在日朝鮮人文学」の地平

——金石範・高史明・李煥成

205

あとがき

253

始源の光

——金史良論

一

日本帝國主義が朝鮮を侵略し植民地統治をはじめた、いわゆる朝鮮併合は、一九一〇年である。ところが、その数年まえ、韓国内の一部知識人を中心に併合請願運動がおこっているそうだった。これは後に百万人もの組織にふくれあがる「一進会」がおこなったもので、「一進会」は李容九ら「近代化主義者」の組織「進歩会」と、宋秉畯ら明治維新に追従する組織「維新会」とが一つになったものであった。

かれらは、「おくれた韓国を近代化する早道は、日本の近代化に従うことだ」と主張し、「わが国を日本の属領にしてくれ」と請願したのである。まさに韓国において、「近代化の歴史は、国を売る歴史でもあった」（これをわたしたち日本人の視点に立っているのなら、日本において、「近代化の歴史は、アジアへの侵略の歴史でもあった」ということになるのだが）といわれるゆえんである。そしてこの歴史と思想は、日本帝國主義による植民地支配が「終熄」した「解放」後も、なおひきつがれ、

三十四年後の現在、朴正熙が唱える「維新体制」「近代化」として亡霊のごとく生きている。

金史良キム・シラムの文学作品をこれらの事実と対峙させてみると、かれの文学的・民族的抵抗の独特の位相が、鮮明に際立ってくる。個々の作品にあらわれた、その抵抗の位相については、のちに綿密に述べたいとおもうが、ひとくちでいって、金史良の文学的抵抗は、「朝鮮的なもの」のあくことなき濃密な形象化にある。そして、その「朝鮮的なもの」の形象化によって逆照射される、日本の植民地統治にたいする声を沈めた告発にある。

いまわたしが、金史良を在日朝鮮人の日本語作家の原点、あるいは始源の光として取りあげるのは、その抵抗のゆえである。失なわれゆく「朝鮮的なもの」の維持と回復が、こんにちの在日朝鮮人作家の文学を色濃く規定し、問われつづけているとき、金史良の存在は、たいへん大きい。

具体的な作品論にはいるまえに、一九一〇年の朝鮮併合から一九四五年八月十五日の「解放」までの時代的背景について、概観しておきたい。金史良は、この同化政策と「内鮮一体」論、そして「天皇の赤子として一視同仁」という怪物が暴れまわる、日本帝国主義の侵略の時代に生まれ、生きぬいて、その文学的生命を燃焼させたからである。

一九一〇年の朝鮮併合（侵略）は、「土地調査事業」「会社令」「朝鮮刑事令」「指紋法」「結社・集会・講演・新聞の統制」など、朝鮮民族から土地と文化と生活をうばうことではじまった。このとき朝鮮における日本の憲兵・警察は、一、六二四個所に一六、八四〇名（一八年にはその約三倍となる）いたといわれる。検挙件数は、たとえば一二年に五二、〇〇〇件、一八年に一四二、〇〇〇件。

翌一年には、「森林令」のほか「朝鮮教育令」も布かれた。

金史良（本名・金時昌キム・シニサン）が平壤府陸路里で生まれたのは、併合から四年後の一九一四年三月三日だ

った。

一九一九年二月八日、東京において「在日留学生独立宣言」が発せられ、三月一日には韓国民衆の抵抗運動の源流ともいうべき「三・一独立宣言」がソウルのバゴダ公園で朗読された。約一カ月、延べ二百万人が参加する抗日民衆蜂起であった。このときの一女子学生にまつわる挿話は、侵略するものの姿と韓国民衆の抵抗とを、象徴的にものがたっている。その女子学生は、右手に韓国の国旗を高々とかけ、「独立万歳」^{ドクトリフ・ワン・セイ}を叫んだ。すると彼女におどろかかった日本の憲兵隊員は、その国旗をかかげた右手を日本刀で切り落とした。彼女は左手に国旗を拾い、高くかかげて、「独立万歳」を叫んだ。すると日本の憲兵隊員は、こんどはその左手を日本刀で切り落とした。しかし彼女はくじけることなく、国旗を口でくわえてかかげ、「独立万歳」の意思表示をつづけたという。

一九二三年九月一日、関東大震災がおき、流言蜚語のなかで朝鮮人大虐殺がおこなわれた。

一九二九年、朝鮮人女子学生にたいする日本人学生による侮辱事件に端を発した、光州学生の反日抗議運動がおき、当時十五歳の金史良はデモに参加。数年後の日本人教師排斥の同盟休校にも加わった。そして退学処分となり、三二年冬、金史良が玄海灘を渡って渡日するきっかけとなった。この三年は、金日成^{キム・イルソン}が抗日ゲリラ闘争に登場した年でもある。翌三三年、金史良は旧制佐賀高等学校文科乙類に入学。『卒業記念誌』に習作「荷」を発表した。

一九三六年、南次郎が朝鮮総督に就任し、植民地統治は全面的に強化された。十月二十八日、金史良は朝鮮語劇団「朝鮮芸術座」と関係したため本富士警察署に検挙され、二カ月も拘留された。かれが東京帝国大学文学部にすんだ年である。また、この年創刊された同人雑誌『堤防』に、エッセイ「雑音」、小説「土城廊」「奪われの詩」などを発表。

一九三八年四月、國家總動員法。そして朝鮮民族にたいする、勞務動員計画が決定。翌年から本格化する強制連行の礎石となった。

一九三九年にはいると、「國民徵用令」が布かれ、朝鮮民族にたいしては「創氏改姓令」が出されて、同化政策、「内鮮一体」論が急激に具体的な形をとりはじめる。創氏改名がもたらした影を映す作品として、金史良に「親方コブセ」がある。

港市×市で開かれた「朝鮮移住民」の運動会の日、徵用で南方へゆく同胞を見送りにきた男や女たちが、ちょうど通りかかったマラソン選手にむかって応援する場面である。かれらの口から出てくる同胞の名前は「よう、頑張れ、朴沢、頑張れ!」「馬川さん、頑張れよう!」「玉村! 玉村! 頑張れ!」「親方! 李山が今通りおるよ」などである。この場面で、金史良がこれでもかこれでもかと登場させる、被植民者の位置を如実にさし示す姓から、わたしたちは創氏改名の暗色の影を、そしてそれにたいする作者の内心に渦まく思いを読みとることができる。朴沢や馬川や玉村や李山たちは、みずからの名前を一字でも守ろうとして残した。それが「創氏改姓令」で本名までもうばわれることにたいするかれらの「抵抗」だった。しかし、このようなささやかな「抵抗」もゆるされなかったひとたちもいた。炭坑や鉱山や土木現場ではたらくひとたちのなかには、日本人監督や班長の姓をそのまま強制されて、山田、田中、吉田などと改姓させられたひとたちも多く存在したからである。

金史良が「草深し」のなかで痛烈に諷刺した「色衣奨励運動」がさかんに行なわれたのもこのころからである。白は朝鮮民族の民族の色ともいふべきものだろう。いうまでもなく「色衣奨励運動」はそれらをうばう運動だった。

「朝鮮文人報国会」の前身である「朝鮮文人協会」の創立大会が開かれたのも、この年の十月二十九

日である。その開会の辞のなかで李光洙は、「本会の趣旨目的は日本精神の上に新しい国民文学を創らんとする自覚であり、決心であり、努力であります。……（略）……日本の文学は日本の国民文学でなければならぬのでありまして、朝鮮語で書かれる文学も当然この範疇を超えることが出来ないのです」と、文化的同化への「屈服」を宣言した。李光洙は、「韓国のトルストイ」といわれ、一九一九年の「2・8在日留学生独立宣言文」の起草にも参与したほどの作家・ジャーナリストである。かれは創氏改名で香山光郎と名のつたが、その香の字は天あまのかぐやまの「香」をとったといわれている。その後の急傾斜の転向をふくめて、李光洙に転向をもたらした思想的背景は、「民族改造論」（一九二三年）という近代化論だった。かれは朝鮮民族の「欠点」を並べたてて、「これを克服しなければ、朝鮮の近代化はできない。民族の改造が近代化にとっては必要なのだ」と考えたのである。「餓鬼道」の作者・張赫宙（のちに野口赫宙と改姓、日本人に帰化）が変貌したのも、このころではなからうか。

これらの動きと呼応するかにように、日本の文学者、たとえば林房雄らが文化的同化論を唱えたが、いうまでもなくそれは、朝鮮の文化を日本のそれに同化させ、隷従させるためにほかならなかった。

金史良は、「朝鮮文化通信」のなかでこれらの同化傾向にはげしい反論を加えた。かれの反論のはげしさをものがたるものに、この年『文芸首都』に発表された小説「光の中に」がある。

金史良がもっとも活発にエネルギーを燃やして創作活動をおこない、発表したのは翌四〇年だが、それらを列挙すると「土城廊」（『文芸首都』二月）、「天馬」（『文芸春秋』六月）、「箕子林」（『文芸首都』六月）、「草深し」（『文芸』七月）、「無窮一家」（『改造』九月）などである。

一九四一年十月二十三日から十一月一日まで、小林秀雄、河上徹太郎らが朝鮮で「文芸銃後運動講演会」を開いた。十二月八日、日本が第二次世界大戦へ突入。その翌日、九日に金史良は治安維持法にもとづく予防検束で鎌倉警察署に検挙され、きびしい冬を約五十日間拘留。朝鮮総督府内に「朝鮮労務協会」が設立されたのも、この年である。

一九四二年二月十三日、強制連行をいっそう組織的、強力に推進するための「半島人労務者活用に関する方策」を閣議で決定。金史良が鎌倉警察署から釈放され、帰国したのは、これと同じ月、冬の二月だった。この年強制連行されたひととは一二一、三二〇名と、前年の二倍以上にのぼった。朝鮮人青壮年にたいする徴兵制も公布。「半島皇国民化」に拍車をかけるための「日本語普及運動」（日本語常用の強制は、一九三六年の南次郎総督就任ではげしくなる以前からつづけられていた）と関連して、朝鮮語学会にたいする大弾圧がおこなわれたのも、この年である。そして、金史良が日本で書いた最後の作品「親方コブセ」が発表されたのが、この年の一月だった。

一九四三年八月一日、朝鮮民族にたいする「徴兵制」実施。朝鮮人学徒にたいする学徒動員。朝鮮の法文科系および専門学校在学生を特別志願兵に採用。金史良が、海軍精神普及のための海軍見学団に参加したのも、この年で、ルポ「海軍行」、長編小説「海への歌」など「国策的」作品が書かれた。この年から翌四四年にかけて「朝鮮語学会事件」で投獄された言語学者が獄死した。

一九四四年六月十八日「決戦態勢即応在鮮文学者総蹶起大会」が開かれる。同九月、朝鮮民族に「一般徴用令」を適用、青紙一枚での強制連行を強行した。ちなみに、この年に強制連行されてきたひとは三七九、七四七名と、一九三九年の一〇倍にのぼった。

一九四五年三月、金史良は祖国を脱出、中国抗日・解放地区（太行山寨）へむかった。それから約五

カ月後の八月十五日、日本が第二次世界大戦に敗戦、朝鮮は「解放」された。

二

金史良の文学的・民族的抵抗を鮮明にあらわす「朝鮮的なもの」の形象化は、かれの作品のなかでどのようになされているか。その一側面は「土城廊」「箕子林」「山の神々」「親方コブセ」などの作品の登場人物に形象化された、濃密な朝鮮の民衆像である。それは「内鮮一体化」論の思想的背景となった「近代化」とは、まっ向うから対決するものといっている。しかも、それらの人間像が描かれたのは、日本の植民地統治による同化政策が熾烈をきわめた一九四〇年前後の時期、日本において李光洙や張赫宙や、そしてプロレタリア詩人の金竜済などまでが「転向」の道をすすみはじめていたことをおもうと、金史良の民族的執着は驚異といっている。かれの文学的抵抗の内容は、この驚異の印象にかさなりあつて、わたしの胸を撃ってくる。

金史良自身が「私の一等最初の作品であり（略）愛着を覚えてゐる」（小説集『光の中に』あとがき）という「土城廊」（『堤防』一九三六年二号、『文芸首都』一九四〇年二月）の主人公・丁元三ジヨンウォンサミに、すでに朝鮮の民衆像はじつに濃厚に形象化されていた。

元三爺は、もとは土豪の奴僕だったが、いまは土城廊ツキムの土幕小屋に住み、先達フンダといっしよに浮浪労働者である支械チキ（担具）軍の仕事をしている。先達は土地を奪われた貧農小作の出である。

元三爺は、体を患っていて充分に働けない先達に米を買いたえたりして面倒をみているが、もともかれは生地を追われて途方に暮れているところを先達の世話で支械軍になったので、その恩義にむくいてるのである。だから先達に米を買ってやることに、かれはこよなく喜びをさえ見出してい

る。

ところが元三爺はやかいた問題をかかえていた。先達の婦（妻）によだれでもたらすふうに惚れてしまうのだ。とはいっても、その恋は「牛糞みたいな乳房」をたらしめて赤ん坊と添い寝する婦をのぞき見て、ついむらむらとしたり、ねずみを追っかけているうちに婦とからみあつて奇声を発したりする（この場面の描写はじつに人間臭にみちている）という態のもので、いつか城内に一部屋借りて婦といっしょに暮らすのが、元三爺の夢である。その夢も、果されるまえに、強盗罪で息子をひっぱられた徳一爺^{ドイル}の婆さんに二人の仲を噂にされ、消えてしまう。

そしてある日、折から土城廊をおそった大洪水で元三爺は流され、それを追う婦の叫びごえを聞いてか、聞かずに、元三爺の姿は濁流に没してしまふ。

一方、先達は妻の氣を元三爺から自分のほうへひきもどそうとして、稼ぎのいい倉庫の仕事にもぐりこむが、患った体はその激しい労働に太刀打ちできず「血まみれ」の姿になつて死んでしまふ。

「土城廊」のあらすじは、ごくおおざっぱにいつて以上のごときものである。このような筋書きのなかで、元三爺と先達によってあらわされた朝鮮の底辺民衆の姿が、浮浪労働者としての支械軍の姿、土幕小屋そして朝鮮の大地をおそう大洪水などを背景に、濃厚に描かれている。

いくらか野卑な恋慕に身をこがし、五〇歳をすぎても独り身なのに妻や子どもをやり病いで死なせたと吹聴する元三爺、妻のうつり氣に憤りを爆発させながらも彼女の氣をひくために過重な労働にはいつてゆく先達、その婦——それらをふくめて「土城廊」には朝鮮の民衆像が強烈に活写されている。

またこの作品にも、やがて「草深し」「天馬」などで痛烈に批判されることになる日本の植民地統

治の影が、随所にあらわれている。元三と先達がともに生地を追われたことの背景には、元三が奴僕をしていた土豪の没落や、奪われかかった小作権をとりもどすのとひきかえに先達の婦が身を売ったという事実などがあり、そこには植民地統治の影がはっきりと表現されている。これらの影の表現は、「朝鮮的なもの」の濃密な形象化と合せ鏡となって、金史良の文学的抵抗の位相を形づくっているものなのである。

この影は、「箕子林」〔文芸首都 一九四〇年六月〕のなかにもみられる。主人公・箕初試^{フジシ}は火田民だったころ、山の伐採権が三村会社にわたっていたために山を追われて易占い師になるのだが、その三村会社にも、またそのとき初試のむすめタンシルを犯した山林監督の洋服男（この洋服男という表現によって金史良は植民地支配者の走狗をシンボルしたのか、再三使われている）にも、日本の植民地統治の影があらわれている。

初試は、傘と筵と易書を唯一の財産として大道で易占いをし、身すぎをしている人物だが、この初試のなかにも朝鮮の民衆像が鮮明に形象化されている。

初試は、かつては北方の遠い山邑で子どもたちに千字文を教えていたこともある。ところがひどい飢饉が村をおそい、かれは乳が枯れてまっ黒になって死んだ赤ん坊を、それと知らずに煮て食べてしまう。その赤ん坊はかれのむすめタンシルの子だったので、それ以来ずっと、彼女からうまれ、いじめつけられることになる。

その後、初試一家は火田民となって山を焼き、収穫して糊口をぬぐうが、三年もすれば土地は枯れてしまい、さきにもふれたように伐採権が三村会社に渡っていたために、山も追われる。が、そのとき山林監督の洋服男にむすめタンシルが犯されるという事件がおこる。これに怒ったタンシルの夫バ